4.4 「個別の教育支援計画」へのICFの活用

静岡県立西部特別支援学校
ＩＣＦ推進プロジェクトチーム代表　　大谷公子

１．はじめに―ICFを取り入れることになった理由―

静岡県立西部特別支援学校（以下，本校）は，在籍児童生徒数146人の特別支援学校（肢体不自由）で，小学部，中学部，高等部の3学部と訪問教育があります。児童生徒の障害の状況に合わせて学部ごとに学習グループ（教科，生活，自立活動）を編成し，指導に取り組んでいます。

本校では『主体的に活動に取り組む子』の育成を目指し，「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」を基に一人一人が持っている力を最大限に伸ばすための指導を行っています。これらの取組の中での課題としては，個別の教育支援計画」が十分に活用されていないこと，児童生徒の障害のみを実態として捉え，その改善・克服を目指して指導することにとらわれがちであること等があげられます。そこで，児童生徒一人一人を多面的に把握し，指導・支援の方向性をより的確に導き出すために，ICFを活用し，個別の教育支援計画の改善・充実を図ることにしました。

２．取組の実際

（1） 研修組織

ICFの考え方を理解し，分類項目も取り入れた「個別の教育支援計画」を作成するために校務分掌の主担当者（以下，課長）及び学部主事を構成員としたICF推進プロジェクトチームを組織しました。さらに,「個別の教育支援計画」を試行するICF試行チーム,「個別の教育支援計画」の試案についての課題を洗い出し，改善策を検討するICF活用チームも組織しました（表１）。また，国立特別支援教育総合研究所の研究協力機関となり，必要に応じて指導・助言を得ながら研修を進めることにしました。

表１　　ICFの研修組織図

チーム名	構成員◎リーダー○サブリーダー	活動内容
ICF推進プロジェクトチーム（9人）	◎中学部主事，○小学部主事，○教務課長，高等部主事，教育支援課長，進路課長，自立活動課長，研修課長，試行チームリーダー	①ICFについての研修を推進する。②各学部または分掌においてICFを活用するための手立てを考える。
ICF試行チーム）（6人）	◎試行チームリーダー(生活学習グループ（以下，Ｇ)，○中１自立学習Ｇ，○高１教科学習Ｇ，小１自立活動学習Ｇ，小４生活学習Ｇ，訪問教育担当	①試案を試行する。②学習グループの立場から，試案についての課題を洗い出す。
ICF活用チーム（14人）	ICF推進チーム＋ICF試行チーム	①ICFの考え方に基づいた「個別の教育支援計画（試案)」を試行し，さらに活用しやすい形式を考えて全校試行に向けて，マニュアル作成を行う。②ICFの考え方についての研修の推進及び「ICF関連図」の活用を図る。

（2）個別の教育支援計画での ICF 活用を推進するための研修の構想

研修活動をとおして ICF を「個別の教育支援計画」等へ活用するための構想（３年計画）を図１に示しました。まず平成 20 年度は ICF 推進プロジェクトチームを中心にしながら ICF について理解し，活用の方向性を検討することにしました。続いて 21 年度は一部の学年で個別の教育支援計画での ICF 活用の試行を行うとともに，ICF についての啓発に力を入れてきました。そして 22 年度は，学校全体での取組を目指し，進めています。

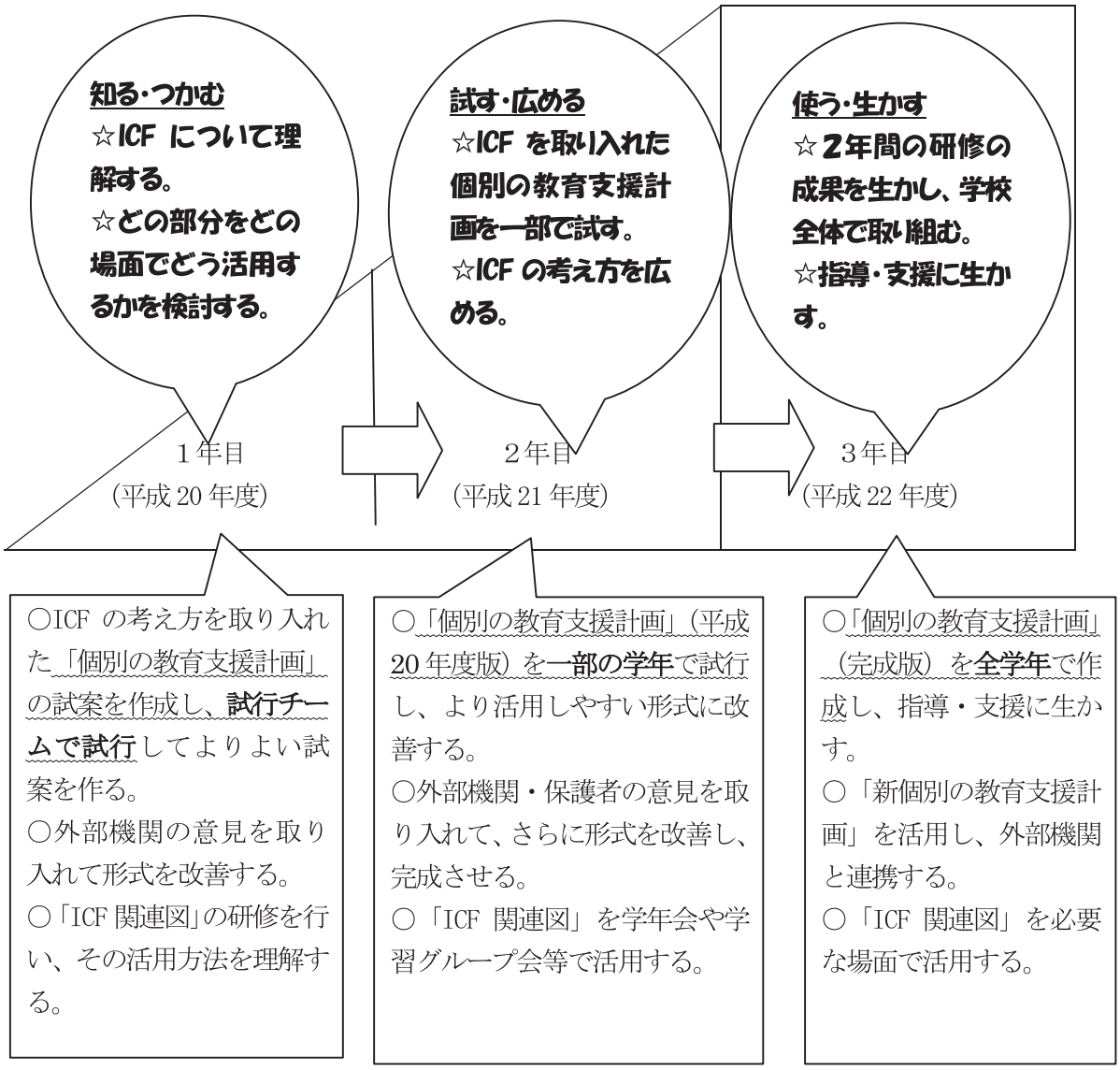

図１　ICF 活用推進構想のイメージ図

（3）平成 20 年度の取組

平成 20 年度は，児童生徒の実態を的確に把握し，効率的な話し合いができるように，「個別の教育支援計画」の形式を「ICF 関連図」とほぼ同じ形にし，試案を作成しました。その試案を試行チームが試行するにあたり，次の３つの視点を満たすことに留意しました。

- K　簡単（分かりやすい）　→　職員・保護者に分かりやすく，他機関に伝えやすい。
- K　効果的（役立つ）　→　児童生徒の指導・支援のための話し合いに役立つ。
- K　効率的（電子化）　→　データの電子化による作成・活用の効率化。

「個別の教育支援計画」の試案を外部機関に提示し，意見を伺ったところ，活用しやすい方向に改善されているという評価を得ました。

また，国立特別支援教育総合研究所の徳永亜希雄主任研究員を講師として招き，「ICF 関連図」の活用についての研修を行い，その活用方法について理解を深めました。

（4）平成 21 年度の取組

平成 21 年度は，ICF 推進プロジェクトチームと自立活動課とが連携し，平成 20 年度までの自立活動実態把握表を表２のように ICF の観点を取り入れた実態把握シートに変え，今まで行っていた実態把握の方法からスムースに ICF の考え方に移行できるようにしました。この表に出てくる大分類とは本校の ICF 関連図の６つの観点（①健康状態，②心身機能，身体構造，③できる活動，④参加の願い，⑤環境因子，⑥個人因子）を意味し，大項目とは個別の教育支援計画の中の“できる活動”の大項目と合わせてあります。

平成 20 年度に作成した「個別の教育支援計画」の試案を一部の学年で試行し，試行学年からの意見をもとに実効性を検証するとともに試行チームからの意見を取り入れ，また，外部機関・保護者の意見も取り入れて，形式を改善し，図２のようにさらに活用しやすい形式に改善しました。

また，「ICF 関連図」を学年会や学習グループ会等で実際に活用したところ，児童生徒を取り巻く環境の把握や話し合いが効率的にできるという成果が見られました。

３．まとめ

（1）多面的な視点への気付きについて

ICF の考え方を理解することで，児童生徒の実態を多面的に捉えることの大切さを実感できました。また，児童生徒の障害の改善・克服を目指すことだけにとらわれなくなりました。今までのように肢体不自由があることだけがその子の実態ではなく，参加や活動の状況や周りの環境や本人の性格等も併せて総合的に捉えることができるようになりました。

（2）書式の工夫による効果的な話し合いの実現について

「個別の教育支援計画」の中に「ICF 関連図」を取り入れたことで，「個別の教育支援計画」をそのまま話し合いのツールとしての「ICF 関連図」として活用できるようになり，学年会や学習グループでの話し合いがしやすくなりました。そのため，課題解決のための話し合いがスムースにでき，目標達成のための支援・手立ての共通理解がしやすく，多くの意見が効率よく出され，記録として保存もできるようになりました。

また，「個別の教育支援計画」をＡ３用紙１枚にまとめたことにより，児童生徒の全体像が把握しやすくなり，保護者や関係機関との話し合いで活用しやすくなりました。

（3）ICF の利点を生かす運用上の工夫について

児童生徒一人一人を多面的に把握し，指導・支援の方向性をより的確に導き出すために，ICF を活用の検討を進めてきました。ICF の分類項目は 1424 項目あり，多岐にわたっているため，

児童生徒の生活を網羅的に把握できるという優れた点がある反面，すべての分類項目を用いることは現実的ではないと判断し，本校独自の実態把握シートを作成することにしました。本シートでは，肢体不自由のある児童生徒に必要な項目について検討した上で電子化し，パソコンで手軽に記入できるようにしました。このことにより本校の児童生徒に必要な実態把握が効率的にしかも的確にできるようになり，引継ぎもスムースにできるようになりました。

４．今後の方向性

これまでの 2 年間の取組を生かし，この ICF の考え方を取り入れた「個別の教育支援計画」を有効に活用し，児童生徒の実態を周りの環境も含めて多面的に捉え，保護者や関係機関と連携をはかりながら，児童生徒の目指す将来像の実現に向けたより良い指導・支援につなげていきたいと思います。そのために 3 年構想の最終年度の 22 年度は，学校全体で着実に進めていきたいと思います。

（　小学　）部　（　4　）年　　【様式1】

♥ 基本情報

本人氏名		保護者氏名
(フリガナ)　セイトク　タロウ		(フリガナ)　セイトク　イチロウ
西特　太郎		西特　一郎
生年月日	性別	住　所
平成　12 年　5 月　4 日	男	浜松市北区根洗町123－1
① 転入学・② 教育形態の変更年月日		家族構成
① 平成　年　月　日より		父　母　兄(中2)　妹(3歳)　祖父　祖母
② 平成　年　月　日より		

♥ 健康状態[変調または病気]

病名	脳性まひ(アテトーゼ)	主治医	根洗　次郎(小児)	病院名	○○病院
			三方　花子(脳外)		○△病院

主治医からの指示：急激な温度変化に注意が必要。

身体障害者手帳　☐無 ☑有　障害名（右上肢機能不全1級）
種　級　No　123456 号　交付年月日 平成　15 年　1 月　26 日

療育手帳　☐無 ☑有　☐A ☑B
No　654321 号　交付年月日 平成　15 年　2 月　25 日

◆ 目指す将来像(3年間を見通して)

使える言葉を増やし、自分の気持ちをいろいろな人に言葉でつたえることができる。
杖を使って自力歩行をすることができる。

できる活動と目標
本人・保護者のニーズなど

◆ 心身機能・身体構造

身長　131 cm　体重　25.5 kg　平均体温　36 度　5 分

発作　☐無 ☑有　投薬(抗けいれん剤)　☐無 ☑有
服用時間・回数（テグレトール朝昼夕食後　デパケン朝夕食後）
坐薬　☐無 ☑有　使用基準（ダイアップ　発作が5分以上続く場合）

医療的ケア　☑無 ☐有（　）

視覚機能　視力　矯正 ☑無 ☐有　右（A）　左（B）
明暗の察知 ☑可 ☐不可　乱視 ☐無 ☑有　眼振 ☑無 ☐有
斜視 ☐無 ☑有　視野狭窄 ☐無 ☑有（左側が見えにくい）

聴覚機能　音の察知 ☑可 ☐不可　補聴器 ☐無 ☑有（人工内耳）

体温調節機能：（夏場は熱がこもりやすい）

関節と骨の機能：右肩を脱臼しているので、引っ張ってはいけない。骨折しやすい。

運動機能：左側手足にまひがある。筋力の低下がみられる。

その他の機能障害：睡眠障害　摂食障害

♥ 環境因子(物的・人的・制度的環境) ※今後必要な支援は、★印をつける。

〈日常生活に必要な道具〉
車いす　PCW(学校内での移動時)　座位保持椅子(家での食事時)　にぎりやすい形状の専用食具　★電動車いす

周囲の人々の存在・かかわり[支援状況]

〈家族・親戚〉
日常的な介助は母親が行う。朝スクールバス停までの送迎は父親が行う。休日は父親と出かけることが多い。

〈友人、知人、仲間、隣人、コミュニティの成員(子供会、学童保育)〉
同じ学年のAさんと仲が良い。
学童保育「△△」を利用している。(月・火・木)
地域の子供会の行事に参加している。

〈対人サービス提供者(ヘルパー)〉
散歩、夕食の介助にヘルパーを利用している。
本人はヘルパーが来るのを心待ちにしている。
17:00～18:30(木・金)

〈保健の専門職(医師、看護師、保健師、PT、OT、ST、義肢装具師、医療ソーシャルワーカーなど)〉
□△療育センターPT　田中先生　週一回(木)
△○整形外科受診　鈴木先生(6か月に1回)

〈その他の専門職(教員、区の障害福祉課員、相談支援事業所相談員など)〉
相談支援事業所「□□」
杉山さん(H18年に相談)

サービス・制度の活用状況

〈交通サービス(送迎サービスなど)〉
送迎サービス「○×」を利用している。
(月、火、水)

〈左記以外のサービス〉
移動入浴サービス(木)16:00～17:00

◆ できる活動

大項目	項目	できる活動・している活動	担当者
学習と知識の応用	書くこと	すべての平仮名を書くことができる。1年生で学習する漢字を練習中である。	竹内
	読むこと	平仮名で書かれた文章を正しく読むことができる。	竹内
コミュニケーション	コミュニケーションの理解	簡単な指示を理解して行動し、目的を果たすことができる。	高橋
	コミュニケーションの表出	慣れた人に対してはっきりとした声で話をすることができる。	高橋
運動・移動	歩行・移動	つえでの歩行は、腰を支えることで5mほど歩くことができる。	PT田中 高橋
	交通機関の利用	今まで3回程度母親と一緒にバスを利用したことがある。	母親
セルフケア	排泄	尿意の問いかけをすると、うなずいたり首を振ったりして答えることができる。	高橋
	食べること・飲むこと		
	更衣		
その他	基本的な対人関係	家族や担任には自分から進んであいさつをすることができる。	

◆ 主な環境因子

主な環境因子	支援内容または目標	記録または達成状況
学　校	担任や友達に自分の気持ちや必要なことを自分から話すことができる。	ほぼ達成できた。 ＊詳しくは「個別の指導計画」参照
家　庭	家族以外の人に対して、あいさつを毎日はっきりした声で言うことができる。	朝のあいさつはできるようになった。
入所施設		
訓練機関	PT　膝の拘縮予防　歩行訓練	歩行練習に意欲的に取り組む。 膝の拘縮は進んでいない。

♥ 参加の願い[本人・保護者の願い]

〈家庭生活〉
・独りで歩くことができるようになってほしい。
・食具を使って自分で食べてほしい。
・自分でできることを増やしてほしい。

〈学校生活〉
・友達と仲良く関わってほしい。
・友達や教師に自分の気持ちを伝えてほしい。

〈余暇活動、地域での生活〉
・スイミングスクールに通いたい。(本人)
・地域の子供会の行事を通して地元の友達と仲良くなってほしい。
・恥ずかしがらず、誰とでも話をしてほしい。
・一人で映画を見に行きたい。(本人)

♥ 個人因子

〈生育歴(教育歴、病歴、手術歴、訓練歴)〉
H15・4　□○幼稚園入園
H16・8　盲腸の手術
H18・4　浜松市立△△小学校入学
H19・10　西部特別支援学校へ転入
H20・1　訪問教育に教育形態を変更

〈性　格〉
明るく社交的。しかし、人見知りをする。

〈好きなこと〉
DVD観賞　鉄道　食べ物ではハンバーグ

〈嫌いなこと〉
突然の大きな音
食べ物ではピーマン

〈その他〉
＜障害理解＞
自分でできないことを適切に依頼したり、自分でできることは自分でやろうとしたりすることができるようになってきた。

作成年月日　平成　21 年　5 月　1 日	作成者氏名　（高橋　三郎　※手書き）	保護者氏名　（西特　一郎　※手書き）

図2　静岡県立西部特別支援学校　個別の教育支援計画〈例〉

表2　実態把握シート（マニュアル）

部　　年　氏名（　　）

自立活動実態表の項目	教育支援計画の項目	大分類	大項目	実態 平成21年度	平成　年度	平成　年度
1　健康の保持						
体温調節	体温調節機能障害	心		気温の上昇に従い、39度台の発熱がみられ		
食　事	摂食機能	心		パンを前歯で噛み切ることができる。 「すりつぶし機能獲得期」		
	食べること	で	セ	食べたいものを手づかみで食べる。教師が手を添えてスプーンですくい、口へ運ぶ。		
	飲むこと	で	セ	コップを持って飲むことができる。 おっぱい飲みになるがストローを使ってひとりで飲む		
排　泄	排便機能、排尿機能	心		排便は不定期で便秘になることもある。 洋式便座で上体を前傾し、自分で腹圧をかけながら排尿		
	排泄	で	セ	午前2時間、午後1時間の間隔でトイレに誘い排泄を促している。7割程度成功。		
覚醒と睡眠	睡眠機能	心		連続で5時間以上の睡眠をとれない。 夜中に起きて一人遊びやいたずらをすることがある。		
発　作	発作	心		脳波には現れているが、発作は見られない。 一日二回服薬。		
呼　吸	呼吸機能障害	心		鼻呼吸が完全ではなく、口が開いていることが多い。		
その他健康状態	その他の機能障害	心		風邪をひきやすく、鼻汁が長引く。副鼻腔炎に		
2　心理的な安定						
情　緒	精神的安定性	心		新しい場所で不安な表情を示す		
状況理解と変化への対応	情動の適切性	心		不安な場面で、持っているものを投げることがある。		
	ストレスへの対処	で	他	見知らぬ人が自分の部屋へ入ってくると気持ちを落ち着ようと身近にある物を投げることがある。		
障害の理解と克服する意欲	障害理解	個		自分の障害の状態を理解することは難しい。		
好きなこと、嫌いなこと	好きなこと、嫌いなこと	個		電気製品（テレビ、パソコン、ラジカセなど）のスイッチ操作が好き。		
3　人間関係の形成						
自己理解	自己に関する見当識	心		自分の姿が鏡に映ったのを見て、笑う。		
人へのかかわり	基本的な対人関係	で	対	人なつっこい。話し掛けられると笑顔で応えたり、自分から進んで友達に抱きついたりする。		
集団へのかかわり	複雑な対人関係	で	対	集まれの曲や言葉掛けを聞いて、集合することができる。		
4　環境の把握						
視　覚	視覚機能	心		視力0.15 乱視矯正用のめがねを所持している。		
聴　覚	聴覚機能	心		聞こえている。 音を聞き分け、面白い音に反応して笑う。		
触　覚	触覚	心		口の周りに触れられるといやがるので、やや過敏が残っていると思われる。		
嗅覚・味覚	嗅覚、味覚	心		なめらかな食感の物を好む。スナック菓子や揚げ物の衣などは目の前にあっても手を出さない。		
感覚や認知の特性	目的をもった感覚的経験	で	学	突発的な大きい音に驚き不快感を示す。 大きな揺れや激しい動きを受け入れ楽しむことができる。		
概念形成能力	見当識機能	心		自分の教室がわかる。 家族や担任など身近な人を見分けることができ		
	知的機能	心		知的発達遅滞がある。		
	注意して視ること	で	学	絵本の知っている場面を指差して見ることができる。 数メートル離れた所にいる人を見分けることができる。		
	注意して聞くこと	で	学	名前を呼ばれると手を挙げて応答する。 歌を聞いて手遊びの振りを付けることができる。		
	模倣・反復	で	学	「こぶたたぬき」の歌に合わせて、おなかをポンポンとたたくことができる。人と別れる場面でバイバイと両手を振ることができる		
	読むことの学習	で	学			
	書くことの学習	で	学	なぐり描きができる。		
	計算の学習	で	学			
	技能の習得	で	学			
	意思決定	で	学			
	問題解決	で	学			

わかる範囲で摂食機能獲得段階（ハンドブック参）も記入

生理的、機能的な部分を記入

障害の重度な児童生徒の場合は、快・不快刺激の情報等について記入

良い知らせを聞いてうれしい気持ちになるというような感情の動き

自分の名前や性別などを知っているかということも含む

感覚の過敏さ（聴覚過敏等）、文字や図形を正しくとらえることの困難さといった認知の偏

自己、他者、時間、周囲の環境等との関係を知ること

見え方

聞こえ方

5　身体の動き

姿　勢	基本的な姿勢の変換	で	運	いす座位から一人で立ち上がることができる。 床からつかまり立ちができる。		
	姿勢の保持	で	運	あぐら座位やいす座位を保つことができる。		
	乗り移り	で	運	クッションチェアに自分で座ったり降りたりすることができる。		
姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用	日常生活に必要な道具	環		歩行器を使って長距離を移動する。		
上　肢	運動機能	心		麻痺はなく、欲しい物に手を伸ばして取ることができる。		
	関節と骨の機能	心		関節の拘縮や骨の変形は見られない。		
	手と腕の使用 （手指の巧緻性）	で	運	両手で紙を破る、チャックを開閉する、本をめくる、スイッチやボタンを押したり回したりする。		
下　肢	運動機能	心		つかまり立ちができ、そこから数歩踏み出すことができる。 静止するのは難しい。歩行器で20分程度歩ける。		
	関節と骨の機能	心		関節の可動域は十分ある。		
日常生活動作	更衣・身体を洗うこと等	で	セ	自分でズボンを引き上げようとする。 手を洗うことを好まず、手を引っ込めようとする。		
移　動	歩行・移動	で	運	いすから立ち上がり、5，6歩一人で歩くことができる。 歩行器を使えば、校内のスロープを登ることもできる。		
	交通機関や手段の利用	で	運	一人では利用できない。		

脱臼や関節の可動域骨折の頻度等

食事の準備・片付けの様子も含む

6　コミュニケーション

コミュニケーションの手段	音声機能	心		笑い声が出る。		
	構音機能	心		ね、で、ぱの発音が聞かれる。		
	コミュニケーション用具及び技法の利用	で	コ	スーパートーカーを活用している。		
理解言語	コミュニケーションの理解	で	コ	始まるよ、おいで、持ってきて、おしまいなど簡単な日常語を理解している。		
表出言語	コミュニケーションの表出	で	コ	「ね、ね」「で、で」など相手の顔を見て発音する。		

特記事項 （車いす、補装具等の製作、病気他）	日常生活に必要な道具	環	バギー。歩行器。補装靴。		
	病気名	健	精神運動発達遅滞。てんかん。		
	主治医からの指示	健			

7　その他